

## △研究ノート▽

ドイツ保険制度におけるハンブルクの  
歴史的意味

坂 口 光 男

一 ハンブルクの国際的評価——。それは、港湾と保険に求められるとみてよからう。政治・経済・産業・文化・人口等が各都市に分散していることを特色とするドイツの諸都市の中にあつて、ハンブルクは各時代を通じて港湾と保険の中心都市としての機能を果していたし、また、現在においても果しているとみてよからう。<sup>1)</sup>すなわち、一方において、造船、船舶、商社、銀行、工業等がハンブルクの経済生活において重要な役割を果しているとしても、港湾は依然としてこの古いハンザ都市にとって特有の意味を有しており、他方において、ハンブルクはドイツ保険史において特有の地位を占めていたし、現在においてもドイツにおける保険都市の中で最大の保険都市の一つであるといわれている。<sup>2)</sup>また、ハンブルクは、以前からドイツにおける保険法の発展に対して大きな役割を果していた。

本稿は、ハンブルクがドイツにおける保険・保険法に対して、各時代において果していた特徴的な役割を、断片的にはあるが素描することを目的とする。とくに、ハンブルクにおける保険の歴史と経験は、現在においてもわれわれに一つの、しかし貴重な教訓を語るであらう。もともと、本稿は、保険・保険法の生成・発展を一般的に扱うもの

でないことはもちろんのこと、ハンブルク以外のドイツにおける保険・保険法の生成・発展を扱うものでないことをおことわりしておく。本稿のごときテーマは、ハンブルク以外のドイツにおける保険・保険法との関連において検討することを要するものではないが、この点に関しては後日に検討を予定している<sup>(7)</sup>。

- (1) この点に関する実証的資料として、P. Schöller「ドイツの都市システム」(明治大学学術国際交流委員会・学術国際交流参考資料集之四五(昭五四)七一―七六頁参照。なお、増田四郎「ヨーロッパの都市と生活」(昭五五)一四五頁も参照。  
(2) F. Büchner, Hamburgs geschichtliche Bedeutung für das deutsche Versicherungswesen, Versicherungswirtschaft 1981, S. 298; Ders., Zur Geschichte der Assekuranz in Hamburg, Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 286, 289.

(3) この点に関する文献として、次のものがあつた(ただし、一九七三年#六の号)。(1) P. Koch, München als Versicherungstadt 1959= Versicherungswirtschaft 1958, S. 289; R. Herrgen, Das Versicherungswesen Bayerns, Europa 1956, S. 38; ユーゲン・グロウ H. Grube, Köln ein alter deutscher Versicherungssitz, Köln 1900 Jahre Stadt 1950; ユーゲン・グロウ U. Perlitz, Zur Entwicklung des privaten Versicherungswesens am Beispiel der Stadt Köln (1), (2), Versicherungswirtschaft 1982, S. 406, S. 524 以下参照。(2) P. Koch, Berlin und die Versicherung, Versicherungswirtschaft 1961, S. 667 und 700; W. Fiedler, Die Geschichte des Versicherungswesens der Reichstadt Nürnberg 1958; P. Koch, Nürnbergs Stellung in der Versicherungsgeschichte, Versicherungswirtschaft 1971, S. 269; クラウス・ホルスマン F.E. Horstmann, Versicherungseinrichtungen in der Stadt Hannover in der Zeit von 1728 bis 1885, 1965= Hannoversche Geschichtsblätter, NF Bd. 20, Heft 1/3; トー・グロウ P. Koch, Aachen und die Assekuranz, Versicherungswirtschaft 1972, S. 295; ユーゲン・グロウ H. Keunecke, Dortmund, Versicherungstadt im Ruhrgebiet, Festgabe für Emil Deierling 1971, S. 56; ユーゲン・グロウ B. Wasser, Das schlesische, speziell das Breslauer Versicherungswesen, Jahrbuch der Schlesischen Friedrich-Wiethelms-Universität zu Breslau, Bd. 3, 1958, S. 276 以下参照。

二 商人的基礎にもとづいて営まれる契約保険 (Vertragsversicherung)<sup>(7)</sup> の中で最も古い保険部門であり、一四世紀半ばにイタリアで成立をみた海上保険は、ドイツにおいては一六世紀の終り以来、まずハンブルクにおいて営まれていた。すなわち、スペインに対するオランダの波乱にとんだ解放闘争中に、故国を去ったオランダ人のうちの多くの者はハンブルクへもやって来た。これらのオランダ人はハンブルクの商業生活において重要な役割を果たすとともに、ハンブルクに海上保険を移植した。<sup>(8)</sup> ハンブルクにおける最初の海上保険契約に関する報告は一五八八年と記録されている。<sup>(9)</sup> ハンブルクへやって来たオランダの商人は、アントワープ保険証券の形式におけるオランダの海上保険法をハンブルクへもって来た。ハンブルクにおける海上保険取引については、オランダの海上保険法が長年にわたって適用されていた。しかし、一六七七年に、保険者の間において、一定の統一的な契約規整(例、保険料前払義務)を実施するために、Vergleich der Assuratoren が成立し、これは一七〇七年まで使用されていた。これによって、ハンブルク海上保険法は、その独自の道を歩みはじめた。さらに、ドイツ海上保険法の必要性に対する要求は、一七三一年九月一〇日に、ドイツにおける最初の海上保険法であるハンブルク保険・海損条例 (Der Stadt Hamburg Assecuranz- und Haverey-Ordnung) において実現をみた。<sup>(4)</sup> この法典は、ハンブルクを越えて北欧の全体的な海上取引に適用され、また、一七四六年のデンマーク保険条例、一七五〇年のスウェーデン保険条例、一七六六年のプロシヤ保険条例の模範となった。<sup>(5)</sup> なお、一七九七年には、ドイツ海上保険営業にとって重要なハンブルク保険者協会 (Ver-ein Hamburger Assecuradeure) の設立をみた。<sup>(6)</sup>

海上保険契約の媒介にあたっては、はじめから仲立人 (Makler) が重要な役割を果たした。その際、海上保険契約は、アントワープに範をとって一五五八年に設立された取引所 (Hamburger Börse) で締結されていた。多数の保険者が取引所に現われていた。それ以来、ハンブルク保険取引所は、ドイツにおいて国際的意味を有する施設となった。

ハンブルクは保険媒介の指導的 (tonangebend) 場所となつていた。<sup>(7)</sup> ハンブルク保険取引所は、一方において、ハンブルクに住所を有するドイツの保険会社、ならびに、ドイツで活動し、多くはハンブルクにその主たる住所を有する外国保険会社の総代理店の集合場所であり、他方において、ハンブルクにおける保険営業において有力な地位を占める保険仲立人の集合場所であつた。<sup>(8)</sup>

- (1) なお、今日の西洋の保険制度の起源として、第一は、ゲルマン的・北欧的起源であり、これは経営主体のいかんにより、後述の公営保険施設と相互保険組合ないし相互会社という二つの系列に分かれ、第二は、ロマン的・地中海的起源であり、これは営利保険の起源として最初から商人的計算にもとづいて生まれたといわれる (水島一也・近代保険の生成 (昭五〇) 三—四頁参照)。
- (2) 海上保険がオランダからオランダ人の手によってハンブルクに移植されたことについては異論はない (木村榮一「ハンブルグ火災金庫の生成と発展」 (損害保険研究二五卷三号) 一二八頁、同・海上保険一〇—一一頁、同・ロイズ保険証券生成史二七二頁、加藤由作・海上保険新講二三頁、H. Møller, Die Wissenschaft von der See- und Transportversicherung im Hafen Hamburg, Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 280; F. Büchner, Impulse des Versicherungsgedankens, Versicherungsmedizin und Versicherungsrecht 1964, S. 43; Ders., Hamburgs Beitrag zur Fortentwicklung des Versicherungswesens, des Versicherungsrechts und der Versicherungswissenschaft, Versicherungswirtschaft 1966, S. 790)。
- (3) Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1966, S. 790; E. Bruck, Das Privatversicherungsrecht 1930, S. 7 Anm. 19; 木村・海上保険一一頁、同・ロイズ保険証券生成史二七二頁。
- (4) Bruck, a. a. O. S. 7. 一七二七年に「Langenbeck は、後にも述べるような著作を刊行していたが、この著作をもとにして一七三一年に「ハンブルク保険・海損条例 (一七三二年一月一日施行) が作られた。これによって、それまでハンブルクにおいて適用されていたオランダ海上保険法から離れ、それとともに「ドイツにおける保険法の近代法的典編纂のための道が開かれた (P. Koch, Ansätze zum Versicherungsgedanken in deutschen Quellen bis zur Hamburgischen Assekuranz- und Haverordnung von 1731, Rechtsgeschichte und Rechtsdogmatik, Festschrift für Hermann Eichler 1977, S. 381—382)°
- (5) Bruck, a. a. O. S. 7.

(6) Vgl. Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 298; W. Heyn, Das schaffende Hamburg, Hamburg als Versicherungsstadt in Vergangenheit und Gegenwart 1939 S. 11.

(7) F. Plaß und F.R. Ehlers, Geschichte der Assecuranz und der Hanseatischen Seeversicherungsbörsen 1902, S. 122.

(8) Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 298.

三 商人的基礎にもとづく契約保険に対して、より古い歴史を有し、組合的(genossenschaftlich)基礎にもとづいて営まれる保険制度は同じくハンブルクにおいて現われていた。

(1) まず、死亡した組合員(Mitglieder)に埋葬を保障するためのギルド(Zünften)と宗教的団体の扶助施設(Unterstützungseinrichtungen)は一五世紀以来確認されている<sup>(1)</sup>。当時の海上取引にともなう特有な危険に対処するために一六二四年に設立された扶助施設としての奴隸金庫(Sklavenkasse)は、海賊の捕虜となった海員を請け戻すためのものであった<sup>(2)</sup>。海賊の捕虜となった海員を請け戻すための身の代金(Ranzionsgeld)の調達に関する最初の報告は、ブレーメンにおいては一五七五年、ハンブルクにおいては一五七七年、リューベックにおいては一五八五年と、それぞれ記録されている。一七世紀においては海賊による捕虜が増加したので、ハンブルクにおいては一六二四年、リューベックにおいては一六二九年に、相互保険の意味における問題の解決が、しかも奴隸金庫(Sklavenkastenともいわれた)の設立という方法で試みられた。基金の形成をも含めて、身の代金の調達は、船主、荷主、乗組員も強制的に分担金(Zulagenといわれた)を支払うという方法で行なわれた。この制度は、商人と乗組員の保護に役立つことから、この制度の適用は、フランス、スペイン、ポルトガルなどの西海(Westsee)または地中海へ航行する船舶には制限されず、北海、バルト海へ航行する船舶にも適用された<sup>(3)</sup>。一六二九年のリューベックの奴隸金庫条例によると、分担金は次のように定められていた。すなわち、大西洋へ航行する船舶では、各積載単位(Last)について二シリング

の追加(Zulage)、貨物は一〇〇マルクごとの価額について同様の金額、船長(Schiffer)と乗組員(Schiffsvolk)はその給与のマルクごとに同様に二シリングとされ、オランダ、イギリス、スコットランド、ノルウェーまたは北海へ航行する船舶では追加は半額とされ、バルト海へ航行する船舶では前述の金額の四分の一とされた。これに対して、一六二四年のハンブルクの奴隷金庫条例によると、追加はリュエベックの約半額であった。もちろん、時代の経過とともに、追加については変更が行なわれた。<sup>(3)</sup>

(2) これらの扶助施設は、当時の社会的事情の現われを示すものとして、ドイツの他の都市とドイツ以外の都市にも存在していた。しかし、これが保険史にとって有する重要な意味は、ハンブルクにおいては組合的保険制度から世界で最初の大規模な保険施設が形成されたという点にある。<sup>(4)</sup> すなわち、一六世紀の終りに、ハンブルクには多数の火災組合(Feuerkontrakt)が存在していた。これらの火災組合が吸収・統合されて一六七六年の一般火災金庫(General-Feuer-Ordnungs-Cassa)となり、この一般火災金庫が現在のハンブルク火災金庫(Hamburger Feuerkasse)の前身となっている。<sup>(5)</sup>

一六世紀の終り、まず最初に一五九一年二月三日に建物の火災損害に際して、相互的・金銭的給付をなすために、約一〇〇名のビール醸造業者が火災組合(Feuer Contract)を設立した。<sup>(6)</sup> ビール醸造権を有する建物は最も大きく、最も立派な建物であった。<sup>(7)</sup> 各組合員は、損害事故の場合に被災者に一〇ライヒスターラーを支払うべき義務を負っていた。火災組合には一〇〇(または一〇一)名が参加していたので、一、〇〇〇(または一、〇一〇)ライヒスターラーが、完全に破壊された建物の再築のために調達された。一六七六年まで約五〇の火災組合契約が結ばれていた。<sup>(8)</sup> 火災危険の軽減をはかるために、直接に近接していない建物のみが一つの火災組合に糾合された。<sup>(9)</sup> 火災組合は経済的・法的にみて純粹の物保険であった。しかし、火災組合の欠点は、組合員数が余りにも少数であるという点に

あった。<sup>(13)</sup>

一六七〇年代にはハンブルクにおいてしばしば大火災が発生し、火災組合の支払能力も危機にさらされた。木組みの家屋 (Fachwerkhaus)、囲うなぐ炬床と燈火 (offene Feuerstelle und offenes Licht) の使用のため、大火災はしばしばハンブルクをおそった。一六七二年、一六七三年、一六七五年の大火災の後、一六七六年の大火災では、クレモン (Cremon) と三〇戸の建物と、その運河にあった船舶、Ratswaage、ミューレン運河 (Muhlenfleet) にあった新しいクレモンが焼失した。<sup>(14)</sup> これらの大火災が契機となって、市参事会 (Rat) は既存の状態の根本的改革に乗り出した。すなわち、市参事会は一六七六年九月二一日に、ハンブルクについての統一的な火災条例 (Feuerordnung) を起草すべく、委員会の設置を市民に提案し、この条例の施行後には従来の火災組合は止揚されるべきものとされた。市参事会と市民との接衝の後、一六七六年二月一七日に法律が制定・公布された。<sup>(15)</sup> 二名の市参事、二名の市会議員 (Oberalten)、二名の出納吏 (Kammereibürger)、五つの教区からの一〇名の市民からなる代表 (Deputation) が構成され、この代表を通じて、市参事会と市民は、火災金庫の事務の処理に対する継続的な影響力を確保した。<sup>(16)</sup> この法律によって、従来の火災組合は、一六七七年二月二八日の「鐘が正午に鳴るまで」存続し、その後は新しい一般火災金庫に吸収されるべきこととされた。<sup>(17)</sup>

一六七六年の一般火災金庫は、既存の小さな火災組合の統合の結果として成立したものであり、したがって、完全に新たな制度の創設を意味するものではない。それゆえ、ハンブルク火災金庫の歴史はすでに一五九一年における最初の火災組合の設立とともに開始しており、一五九一年はハンブルク火災金庫の起源年であり、一六七六年はハンブルク火災金庫の設立年である。<sup>(18)</sup> しかし、一般火災金庫は最古の大規模な保険企業であるのみならず、世界で最古の火災保険である。<sup>(19)</sup> それはドイツ公営保険の嚆矢としての役割を果しているが、同時に、ヨーロッパ、とりもなおさず世

界における公営火災保険の最初のものである<sup>(2)</sup>。すなわち、たしかに、一七世紀のはじめに、ドイツにおいて広い基礎にもとづく建物火災保険施設の設立のための構想が存し、また、オランダでは一七世紀のはじめに、イギリスでは一七世紀の半ばに、海上保険会社の設立が計画されていたが、大規模な保険施設はまず一六七六年にハンブルクにおいて実現したのである。<sup>(2)(3)</sup>

— 法 律 論 義 —

- (1) W. Heyn, Die Geschichte des hamburgischen Versicherungswesens, in: Hamburg als Versicherungsstadt 1950, S. 10f.
- (2) W. Ebel, Über Sklavenversicherung und Sklaveversicherung, Zeitschrift für die gesamte Versicherungswissenschaft 1963, S. 225.
- (3) Ebel, aa. O.S. 225.
- (4) Ebel, aa. O.S. 225-226.
- (5) Büchner, aa. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 298.
- (6) なお、わが国において、一般火災金庫、ハンブルク火災金庫の名称の原語の使用が区々にして不正確であるとの指摘については、木村・前掲損害保険研究一二三—一二五頁を参照。本稿では木村教授が使用されている原語を用いた。
- (7) Büchner, aa. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 298; Ders., Die Entstehung der Hamburger Feuerkasse und ihre Entwicklung bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts, 300 Jahre Hamburger Feuerkasse 1976, S. 4; 小島昌太郎・保険学総論三四九頁、相馬勝夫「ドイツ火災保険前史」(損害保険研究一九卷二号)四二頁。もともと、木村・前掲損害保険研究一二六—一二七頁は、多くの場合一〇一名とされ、同「ハンブルク火災金庫と新価保険」(相馬勝夫博士古稀祝賀記念論文集・現代保険学の諸問題)四五四頁では通常約一〇〇名とされ、あるコントラクトの例では一〇一名とされ、また、Heyn, aa. O. Das schaffende Hamburg, S. 15 以下一〇〇名または一〇一名とされている。Hamburg Porträt, Heft 2, Selbsthilfe gegen Feuersnot, Museum für Hamburgische Geschichte 1976, S. 4; P. Koch, Begriffe und Daten aus der Versicherungsgeschichte, Sonderdruck für die Schriftenreihe des Seminars für Versicherungsbetriebslehre an der Universität München 1964, Heft 22, S. 4; E. Klessmann, Geschichte der Stadt Hamburg 1981, S. 172 以下とある。一〇一名とする。



- (8) 火災組合は一般には Feuerkontrakt と表現されるが、一五九一年二月三日設立の火災組合については、本文のように Fewer Contract と表現されている (a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 41)。
- (9) その規約については、木村・前掲損害保険研究一五三—一五七頁参照。なお、火災組合の起源に関する争いについては、木村・前掲損害保険研究一二七—一二九頁参照。
- (10) 火災組合に糾合したのがビール醸造業者であったということは、一四世紀から一六世紀までビール醸造業がハンブルク経済の最も重要なものであったことを想起させる。当時、リューベックは店屋(Kaufhaus)、リューネブルクは塩屋(Salzhaus)ケルンはワイン屋(Weinhaus)、ハンブルクはビール屋(Brauhaus)と云う格言で呼ばれていたことから知りうる(Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 7; Heyn, a. a. O. Das schaffende Hamburg 1939, S. 15-16)。(ハンブルクにおけるビール醸造業の起源は一三世紀までさかのぼる。ハンブルクはハンザのビール屋(Das Brauhaus der Hans)という名声を受けていた。ビールはハンブルクの最も重要な輸出品であり、ハンブルクの最もはやかな家はビール屋であった。一三七六年には四五七のビール醸造業者がおり、一五一七年までビール屋は五三一に増加していた。しかし、一六世紀の終り頃にはビールの生産高は減少した。高価になった小麦を節約したためにビールの品質は失われ、また、人々の好みもワインやブランディのために変化したからである。また、その間において、一七種類の輸入ビールが存し、これらのビールはつねに人気があった。一六五〇年にビールの消費は頂点に達した。ビールはその優勢な地位をコーヒーとティに譲り渡した。ビアホールにおいてさえコーヒーが飲まれた。ビール醸造業者の優勢な地位は決して再び回復しなかった。ハンブルクのビールは輸出品として、もはや主たる役割を果さなくなってしまった(Klessmann, a. a. O. S. 179-180)。
- (11) Hamburg Portät, S. 4; Klessmann, a. a. O. S. 172; もともと、木村・前掲損害保険研究一三—一頁、Büchner, a. a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 287 は四六の火災組合とする。しかし、正確な数は確定されないとみられる(Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 9)。
- (12) 木村・前掲損害保険研究一三—一頁、Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 299; Hamburg Portät, S. 4。
- (13) 木村・前掲損害保険研究一三—三頁、Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 10; Hamburg Portät, S. 4; なお、近藤文二・保険学総論(昭一五)一七八頁、一八六頁は、火災組合においては填補金が再築のために使用すべきこと、加入者の範囲・地域が限定されていたこと等から、火災組合は保険とは認められないとされる。
- (14) Klessmann, a. a. O. S. 170; 多くの小火災を除いて、一六〇六年から一六八四の七八年間に旧市街(Altstadt)になくて少

なくとも三四五の建物が焼失していた (Klessmann, a. a. O. S. 171)。

- (15) 作成された草案には市議会側の要求により、保険価額の一定割合は被保険者の自己負担とすること、保険金は建物の再築に使用されるべきことの二条項が挿入されて立法化された (木村・前掲損害保険研究一三二頁)。

- (16) Hamburg Porträt, S. 5; Klessmann, a. a. O. S. 172.

- (17) 一般火災金庫規則によると、①家屋の買入・相続・新築した者が金庫に登録しないと事故の場合に保護を受けることができないこと、②最高保険金額は当初は一五、〇〇〇マルクとされ (もつとも、木村・前掲損害保険研究一三四頁は一八、〇〇〇マルクとされる) この範囲内で損害額は全部填補され、③火災予防のために建物の価額の四分の一は自己負担とされ、④加入拠金 (Eintrittsbeitrag) は一、〇〇〇マルクの評価額につき一マルクとされ、⑤保険料は保険金額の〇・二五パーセントであったが、大きな損害に際しては保険料の追徴が行なわれ、⑥適用範囲は、一八四〇年までは市壁内の建物に制限された (Hamburg Porträt, S. 5; 木村・前掲損害保険研究一三三—一三四頁、小島・前掲三五〇頁)。なお、規則については、木村・前掲損害保険研究一五七—一六三頁参照。

- (18) Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 12.

- (19) Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 3; Hamburg Porträt, S. 5; Klessmann, a. a. O. S. 172; 木村・前掲相馬論文集四五二頁。

- (20) この一般火災金庫にならって、各地に火災金庫、公営火災保険所が設立されたが、その中で現存の最古のものは一七一八年に設立されたベルリンの火災保険所 (Feuersozietät) である (Büchner, a. a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 287)。かくして、一八世紀は「ドイツ公営火災保険建設の典型的な世紀」になった (水島一也・前掲四頁参照)。

- (21) Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1982, S. 300; なお、ドイツ公営火災保険制度の特色を要約すると次のとおりである。①国・州・都市等の公法上の主体によって設置された相互保険であること、②公益性に徹するために、保険を越えた分野にも意を用いていること。これは、(i) 公営火災保険施設による防火・消火の促進であり、これによって損害率、したがって、保険料の低下となり、加入者の負担が軽くなる。(ii) 不動産信用の保全である。(iii) 加入強制によって募集業務を不要とし、それによって事業費の低下、したがって、加入者負担の軽減がはかられる。これらの公益性は資産運用および保険保護の内容の充実にも浸透している。資産運用は純然たる営利的考慮にもとづくことは禁止され、保険保護の内容の充実は新価保険、査定価額、再築義務等に現われている。再築義務は、不動産信用の保全という目的からいって当然である。③事

業地域を一定の管区に限定していることであり、保険の担い手が公共体であることから、行政区画に従って保険管轄が自然に定まる（相馬勝夫「ドイツ公営火災保険考」（加藤由作博士還暦記念・保険学論集）二七四—二八六頁参照）。

(22) なお、一般火災金庫の一八四〇年までの発展は次のとおりである（木村・前掲損害保険研究一三五—一三九頁、同・前掲相馬論文集四五頁以下参照）。①一六八四年には第一の危機に直面し、この年の火災のために追徴金を取り立てられたが、追徴金を支払った者の脱退を認めた。②一六八五年五月一日に規則が改正され（Revidierte General-Feuer-Cassa-Ordnung）、家屋を購入・相続・新築した者がこれを登録しなかったときは一〇ターラーの罰金を科せられ、保険料は保険金額の〇・五パーセントに引き上げられ、追払義務は据え置かれた。③一七五三年九月二八日の新規則（Neue General-Feuer-Cassa-Ordnung）では規則の大幅な修正が行なわれ、従来の一八、〇〇〇マルクという最高保険金額の制限は除かれたが、四分の一の自己負担はそのままとされ、また、はじめて危険の程度に応じた保険料が課せられることになった等である。④一八一七年一月一日の新規則（Neue revidierte Hamburgische General-Feuer-Cassa-Ordnung）は従来の規則を大幅に修正した。まず、絶対的保険義務が導入され、一切の公的・私的建物は金庫に付保すべきものとされた。また、自己負担は廃止され、保険引受のときに価額の評価を行ない、超過・重複保険の防止に留意し、保険料追加払義務は存続され、消防制度は金庫の管轄とされた等である。⑤一八二二年には火災をともしなわぬ落雷損害についても填補が行なわれるようになり、⑥一八三三年には新価保険が導入され（金庫における新価保険の歩みについては、木村・前掲相馬論文集四五七頁以下参照）、保険料は一率に〇・五パーセントとされ、保険料追加払義務は従来通りとされ、建築規定が設けられた等である。

四 このように、最初の大規模な保険施設がドイツで設立され、これにならって各地に火災金庫、公営火災保険所が設立されたが、現代的保険事業の基礎は一八世紀のイギリスに求められるといわれている。<sup>①</sup>すなわち、一七一〇年に、ロンドンで Charles Povey によって Sun Fire Office が設立されたが、これは現存するイギリスの私保険会社の中で最古のものである。<sup>②</sup>一八世紀のイギリスにおいては多数の海上・火災・生命保険会社が、一部は株式会社として、一部は大規模な相互会社として設立された。他方、一七世紀の終りに起源を有し、ロンドンにおける海上保険取引を飛躍的に盛んにしたロイズは、個々の保険者のシンジケートとして成立したものである。<sup>③</sup>

一八世紀のイギリスにおいて重要な意味を有するのは、統計的・数理的基礎にもとづく保険技術の確立である。この生命保険技術は、まず一七六二年のロンドンにおける *Equitable* 相互会社の設立に際して応用された。この会社は、完全な死亡生残表にもとづいて生命保険事業を営んだ元祖である。<sup>(5)</sup> 他方、寡婦・孤児・結婚扶助金庫 (*Widwen-, Waisen-, und Heiratskassen*) は、それらが一七世紀の終りから一八世紀にかけて、人道的啓蒙主義の影響を受けてドイツ、イギリス、オランダに多数設立されたように、当時のハンブルクにも存在していた。しかし、当時は正確な統計的・数理的基礎にもとづく死亡率の計算が欠けていたために、これらの金庫は長続きはしなかった。<sup>(6)</sup> しかし、これらのうちの一つであるハンブルク一般扶助施設 (*Hamburgische Allgemeine Versorgungsanstalt*) は、小規模ながら当初から手堅い保険技術的基礎にもとづく扶助金庫として設立され、ドイツにおける最初のものであった。<sup>(7)</sup> このハンブルク一般扶助施設は一七七八年に、ハンブルクの数学者・商業学者 *Johann Georg Büsch* の協力のもとに設立され、一九五七年一月一日に *Hamburg-Mannheimer* に移転されるまで活動していた。<sup>(8)</sup>

また、一八世紀後半から一九世紀前半にかけて、ハンブルクには商人的基礎にもとづく多数の私保険会社が活動していた。その際、これらの私保険会社の設立にあたっては、一八世紀後半にすでにイギリス、オランダ、デンマーク、スウェーデンに海上・火災保険会社が存在していたという事実が重要である。一七二〇年に、ハンブルクの保険仲立人 *Marcus Russe* は海上保険株式会社の設立を企画したが、ハンブルク市民の了解を得られないために失敗した。しかし、イギリスに範をとったドイツにおける最初の私保険会社として、ハンブルクにおいて一七六五年一月一日に、海上・火災保険のための株式会社である *Assicuranz-Compagnie für See-Risiko und Feuers-Gefahr* が営業を開始した。<sup>(9)</sup> 同じ年に海上・火災保険会社がベルリンで、一七六九年にブレーメンで、また、一七九五年に海上保険会社がリューベックでそれぞれ設立されていた。<sup>(10)</sup> その際、設立者の請願書 (*Eingabe*) においては、ヨーロッパの他の商業

都市の例が参照された。これに続いて多くの保険会社の設立が行なわれたが、これらの会社はとりあえず一〇年間にかぎってのみ設立され、その後は新しい会社のもとに継続させられた。一七六五年における最初の保険会社の設立以来、一八〇七年までの間にハンプルクには三七よりも少なくない保険会社が設立されていた。<sup>(1)</sup>他に、ハンプルク以外のドイツの三つの保険会社、ならびに二つの外国保険会社がハンプルクに住所を有していた。しかし、ハンプルクに対しても大きな打撃を与えたナポレオン戦争のために、多くの保険会社は長期間継続しなかったか、または清算された。<sup>(2)</sup>しかし、これらの会社のうち、一八〇四年に *Johann Wilhelm Duncker* によって設立され、一八一六年に再建された *Dritte Hamburger Versicherungs-Gesellschaft* は、一八五七年に設立された *Nord-Deutsche Versicherungs-Gesellschaft* の起源となっている。また、前述の三七の保険会社のうちの二つは、一八〇六年に *Wilhelm Benecke* によって設立された生命保険会社であり、これはドイツにおける最初の生命保険株式会社であった。しかし、これは当時の戦乱のために正当に発展することはできず、八年後に廃業した。<sup>(3)</sup>

(1) 海上保険はイタリアに、火災保険はシュレスヴィッヒ・ホルシュタインの火災ギルドおよびハンプルクの火災組合に起源を求めるのがドイツの学者の見解であるが、ドイツにおける火災保険会社・公営火災保険所の事業は、一六六六年九月二日のロンドンの大火災を契機としたイギリスの火災保険を模倣したものであり、現代的火災保険の萌芽はイギリスに求められるといわれている（小島・前掲三五二—三五三頁）。

(2) 朝川伸夫・印南博吉編・保険辞典（昭三六）上巻三一八頁、*Bücher, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 14*；なお、ロンドンにおける一六六六年、一八六一年の大火災と、これが火災保険に対して与えた影響の詳細については、木村栄一「ロンドン大火と火災保険」（損害保険研究四四卷三号）一頁以下参照。

(3) ロイドのコーヒー店は一六八八年二月以前からあったといわれている（木村・海上保険一三頁）。ロイズの歩みの詳細については、木村・海上保険二二—一四頁参照。

(4) ロイズの業務は保険事務と通信事務に大別される（小島・前掲一七九頁）。保険事務は、ロイズの組合員である個人保険

者のために、保険事業を営むために必要な組織・設備を作ることである。ロイズは保険取引の場所であり、保険はロイズ「で」個々の個人保険者と契約されるのであり、ロイズ「と」契約されるのではない（木村・海上保険一六頁）。また、通信事務は、海事に関する世界の情報の収集・提供である（その主なものにつき、木村・海上保険一七頁参照）。

- (5) Büchner, a. a. O. *Zeitschrift für Versicherungswesen* 1964, S. 288; 小島・前掲三六四頁、三六七頁。一七世紀の半ばに確率論が完成し、これが人類の生死の研究に応用された。生死に関する研究が最も進歩したのはイギリスにおいてである。すなわち、生死に関する統計の完成に最も貢献をなしたのは、星学者のハレイであることは一般に認められている。生死に関する統計の研究は一七世紀末から一八世紀はじめにかけて完成された（小島・前掲三四〇—三四二頁）。

- (6) Büchner, a. a. O. *Zeitschrift für Versicherungswesen* 1964, S. 286.

- (7) Büchner, a. a. O. *Versicherungswirtschaft* 1981, S. 301; なお、現存のドイツの生命保険会社の最初の大規模なものは、一八二七年に Ernst Wilhelm Arnold にて設立された Gothaer Lebensversicherungsbank auf Gegenseitigkeit である（朝川＝印南編・前掲二五一頁）。なお、ゴータ保険施設の成立過程と制度的特質については、水島・前掲二五—三二頁参照。

- (8) Büchner, a. a. O. *Versicherungswirtschaft* 1981, S. 301; Ders., a. a. O. *Zeitschrift für Versicherungswesen* 1964, S. 286.

- (9) Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 16; Ders., a. a. O. *Zeitschrift für Versicherungswesen* 1964, S. 288-289.

- (10) G. Helmer, *Grundlinien der Geschichte der Versicherung, Internationales Versicherungsrecht, Festschrift für A. Ehrenzweig* 1955, S. 66.

- (11) Pfaff und Ehlers, a. a. O. S. 257; 以下の会社名については Vgl. Pfaff und Ehlers, a. a. O. S. 257-260.

- (12) Büchner, a. a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 16.

- (13) Büchner, a. a. O. *Versicherungswirtschaft* 1981, S. 302; Ders., a. a. O. *Zeitschrift für Versicherungswesen* 1964, S. 289.

五 ドイツ保険史にとって重要な出来事は、一八四二年五月四日から五月八日にかけてのハンブルクの大火災であ

る。この大火災は次のようであった。<sup>(1)</sup>

五月四日の夜一時に火災警報が鳴った。火災はロエディングスマルクト (Rödingsmarkt) とダイヒシュトラーセ (Deichstraße) との間の狭い、ダイヒシュトラーセ運河に面した倉庫内で発生した。<sup>(2)</sup> 大規模な消火ポンプの動員にもかかわらず火災はくいとめられなかったので、朝四時三〇分に類焼防止のために周辺建物のとりこわしが要請された。しかし、火災金庫の代表と市参事会はこれに決心しかねていた。とりこわされた建物の所有者に対する高い賠償をおそれたからである。<sup>(3)</sup> しかし、朝一一時三〇分にニコライ教会の塔が焼えたとき、市参事会はとりこわしに同意した。これによって、若干の場所ではある程度の効果を収めた。しかし、折りからの強い南風にあおられて、火災前線 (Brandfront) は、当時のすべての消火手段をもってしてもくいとめることができない範囲にまで達した。この大火災に際しては、近隣諸都市への救援の呼びかけにはハンブルククックスハーフェン指示電信線 (Zeigetelegraphenlinie) が、避難した無宿者 (Obdachlose) の輸送と救援隊・資材の調達にはハンブルクベルゲドルフ鉄道が、ハノーファとプロシア砲兵隊 (hannoversche und preussische Artillerie) は燃焼建物のとりこわしに際してハンブルク兵を、それぞれ支援した。<sup>(4)</sup> 七九時間にわたる燃焼後の五月八日に、ハンブルク北東のヴァルリンク (Walling) で火災はようやくその終りをみた。<sup>(5)</sup> しかし、これは消火活動によるものではない。けだし、そこは緑地帯のために燃えるものもはやなかったからである。<sup>(6)</sup>

この大火災によって、旧市街の最も重要な部分が破壊された。すなわち、聖ニコライ (St. Nicolai)、聖ペトリ (St. Petri)、聖ゲルトルト (St. Gertrud) の三つの重要な教会が破壊され、市庁舎を含む旧市街の中心、そして多数の公的建物が破壊された。当時のハンブルクの人口は約一六万人であったが、全部で四、二一九所帯 (Haushalten) をもつ一、二〇二の建物が焼失し、それによって約二万人が無宿者となり、五一人が生命を失い、一二〇人が負傷した。

損害額は一億三、五〇〇万マルクに達した<sup>(7)</sup>。火災金庫の損害額は当時の貨幣にして約四、二〇〇万マルクに達し、これは、すべての付保建物の価額の二〇パーセント以上であった<sup>(8)</sup>。動産については他の私保険が存在していたが、それらの私保険のうちの若干のものは異常な負担によって破産においこまれた<sup>(9)</sup>。

この大火災は、当時の保険専門家の予想を全く裏切るものであった。すなわち、ハンブルクにおける火災保険会社の設立に対して大きな影響力を与えていた Johann Georg Büsch は、一七九四年の著作<sup>(10)</sup>において、ハンブルクにおける火災予防・鎮圧措置の状態からみて、ハンブルクには大火災はありえないものと述べていた<sup>(11)</sup>。この見解に従い、一七九五年に「Georg Elert Bieber の勧めで」<sup>(12)</sup>とくに家財保険営業のためにハンブルクにのみ限定される相互団体である Association Hamburgischer Einwohner zur Versicherung gegen Feuersgefahr が設立された。しかし、大火災はこの予想を全く裏切った。Biebersche Vereinigung は全く支払不能となり、その他のドイツならびに外国の保険会社も重大な損失を被った。また、ハンブルク火災金庫の負担すべき損害は、国家からの借入金をもって填補された<sup>(13)</sup>。この大火災の経験による教訓の第一は、ハンブルクにおける進歩的な建築計画の作成・実行、ならびに火災に対する安全のために新たな建築警察規則 (baupolizeiliche Vorschriften) が公布されたこと、第二に、火災保険者は、従来にも増してその保険引受部分について相当の限度を考慮すべく、この認識は、近代的な再保険の確立、ならびに独立の再保険会社の設立へと導いていった。そして、一八四二年の終りに、最初の独立の再保険会社である Kölnische Rückversicherungs-Gesellschaft の設立が計画され、一八四六年に許可が与えられ、一八五二年に営業を開始した<sup>(14)</sup>。ドイツにおける再保険の発達を促したのは、この大火災を通じてである。その後の再保険会社として、一八六三年に Schweizer Rück が、一八八〇年に Münchener Rück がそれぞれ設立された<sup>(15)(16)</sup>。歴史に残る一八四二年のハンブルクの大火災は、再保険の確立・推進に対して大きな衝撃を与えたのである。



- (1) 今の地とていふは Klessmann, a.a. O.S. 395-406 が詳し。
- (2) 今のため、現在、今の場所にある建物とは Brandanfang といふ標識がつけられて (Klessmann, a.a. O.S. 395)°
- (3) Klessmann, a.a. O.S. 396.
- (4) Hamburg Porträt, S. 9-10; Klessmann, a.a. O.S. 398-402.
- (5) それ以来、現在、今は Brandende 地といふ (Klessmann, a.a. O.S. 401)°
- (6) Büchner, a.a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 32.
- (7) Klessmann, a.a. O.S. 401.
- (8) Hamburg Porträt, S. 10; 木村・前掲損害保険研究一三九頁°
- (9) Hamburg Porträt, S. 10-11.
- (10) Allgemeine Übersicht des Assekuranzwesens als Grundlage zu einer unbefangenen Beurteilung von G. C. Biebers Plan zur Errichtung einer für Hamburg möglichst vorteilhaften Vskompagnie gegen Feuergefahr (Vgl. A. Manes, Versicherungs-Lexikon 1924, S. 416).
- (11) Vgl. Büchner, a.a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 31.
- (12) 木村・前掲損害保険研究一三九頁° Büchner, a.a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 302.
- (13) Büchner, a.a. O. Versicherungsmedizin und Versicherungsrecht 1964, S. 46-47; Ders., a.a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 33-34.
- (14) Heyn, a.a. O. Das schaffende Hamburg, S. 19; Büchner, a.a. O. Versicherungsmedizin und Versicherungsrecht 1964, S. 46; Ders., a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 289; なお、今の当時になつてハンブルク一般火災金庫のあり方をめぐる議論について、木村・前掲損害保険研究一四〇—一四一頁参照°
- (15) Büchner, a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 289; Ders., a.a. O. 300 Jahre Hamburger Feuerkasse, S. 34.
- (16) なお、一九一二年に、最初の大規模な労働組合的生命保険会社 (gewerkschaftlichgenossenschaftliche Lebensversicherungsgesellschaft) である Alte Volksfürsorge が設立されたし、また、信用保険は一八九八年と一九〇三年に、まずハンブルクの保険会社によつて営まれたが、これは一九一七年にヘルリンに設立された Hernes Kreditversicherungs-Akti-

gesellschaft へ引き継がれているが、その主たる住所はハンブルクにある (Büchner, a. a. O. Zeitschrift für Versicherungs-wesen 1964, S. 289)。

六 ドイツ保険史に関して見落しえないことは、第二次大戦後、ハンブルクの保険者とハンブルク市当局が中央保険監督官庁の再建に際して果たした役割である。<sup>①</sup>すなわち、一九四五年五月八日のドイツの無条件降服とともに、ライヒ保険監督官庁はベルリンにおける活動を閉鎖せざるをえなくなったが、一九四六年四月に、当時のイギリス占領地区<sup>②</sup>について、保険監督の実施についての地区官庁 (Zonenant) が作られた。これは、ハンブルクの保険者の発案と当時のイギリス占領当局 (Besatzungsbehörde) 代表者の了解にもとづくものであった。この地区官庁は、一九四九年四月一日の発効とともに、イギリス占領地区にぞくするドイツの共通の官庁となった。<sup>③</sup>これによって、ハンブルクとドイツの他の州 (それに直ちにブレーメンが参加した) は中心的な保険監督の観を呈した。<sup>④</sup>この地区官庁には、以前にベルリンのライヒ保険監督官庁で活躍していた多くの役人もいた。一九五一年七月三十一日の、連邦保険監督官庁設立に関する法律によって、現在の連邦保険監督官庁はその住所をベルリンに置いているが (Gesetz über die Errichtung eines Bundesaufsichtsamtes für das Versicherungs- und Bausparwesen vom 31. Juli 1951, Art. 1) <sup>⑤</sup>、地区官庁の役所は再び専門監督官庁へと発展し、地区官庁の所長と役人は一九五二年の春にベルリンへ移った。そして、一九五二年四月一日に、現在の連邦保険監督官庁はベルリンの Ludwigkirchplatz にあるライヒ保険監督官庁の建物内で活動を開始した。<sup>⑥</sup>このように、戦後の困難な事情にもかかわらず、地区官庁設立の推進によって、ドイツにおける中央保険監督官庁の再建のために果たしたハンブルクの保険者とハンブルク市当局の功績は大きい。

また、ハンブルクの保険者は、戦後における保険者の団体の再建のためにも大きな役割を果たした。ハンブルクに住所を有するこの種の保険者の団体として、ハンブルク保険者協会 (Verein Hamburger Assecuradeure) <sup>⑦</sup>、ドイツ運送

保険連盟(Der Deutsche Transport-Versicherungs-Verband)<sup>7)</sup> 責任・傷害・自動車交通保険者連盟 (Der Verband der Haftpflicht, Unfall-und Kraftverkehrsversicherer)<sup>8)</sup> 公法的保険研究団体 (Die Arbeitsgruppe öffentlich-rechtliche Versicherung)<sup>9)</sup> など<sup>10)</sup> ハンカ工業料率団体 (Die Hansa-Industrie-Tarifvereinigung) など<sup>11)</sup>。

- (1) Büchner, a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 289; なお、ドイツの保険監督制度を概観するものとして、堺雄一「外国事情—ドイツ」(新生命保険実務講座第九卷)一八二—一八三頁参照。
- (2) その地域については、山田晟・ライツ法律用語辞典(昭五七)五〇九頁参照。
- (3) Büchner, a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 290.
- (4) Büchner, a.a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 304.
- (5) Büchner, a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 290; Ders., a.a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 304.
- (6) Büchner, a.a. O. Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 290.
- (7) Büchner, a.a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 304.

七 ハンブルクにおいては、多くの研究者が保険法・保険学の発展のために大きな貢献をなしていたことも見落しえない。

保険に関する著作一般がそうであるように、ハンブルクにおいて保険の問題について最初に刊行された著作は海上保険法に関するものである。この分野における著作は、ハンブルクにおいては、すでに一七世紀と一八世紀に刊行されていた<sup>12)</sup>。すなわち、一六三〇年には、ハンブルクの弁護士 Rutger Ruland の著作が刊行されていた。この著作は、Ob nemlich / wann einer auff ein Schiff versichern lest / aber kein praemium bezahlt / und hernacher zur See Schaden erfolget / als dann denselben er als Assecuratorus, von den Assecuratoribus mit rechte zu fordern vermüge? というテーマで、二〇九頁にわたる著作であり、付保船舶について保険料が支払われていないならば、保険事

故において給付請求権が存在するか否かの問題について論じたものであり、保険契約の本質を詳細に解明した著作であるといわれている。<sup>(2)</sup>その後、一七二七年に、Langenbeck による Anmerkungen über das Hamburgische Shift- und Seerecht が、一七五三年に、Magens による海上保険法に関する体系的叙述が現われ、また、一七八二年には、Engelbrecht は Theorie und Praxis der Assecuranzen と題する、ロンドン人の四巻の著作のドイツ語翻訳を行ない、ハンブルクの保険商人に提供した。<sup>(3)</sup>また、この当時、すでにハンブルクの多くの法律学者によって、海上保険法に関する論文が書かれていた。たとえば、Johann Peter Sieveking は一七九一年に、Von der Assecuranz für Rechnung eines ungenannten Versicherten という論文を書いていたが、この論文は今日においてもなお現実的意味を有する問題を扱ったものであるといわれている。<sup>(4)</sup>また、実務家であり、研究者でもあった Wilhelm Benecke は、哲学的・宗教的著作の他に、System des Assecuranz- und Bodmereiwesens をハンブルクで刊行していた。その第一巻は一八〇五年に、第二巻は一八〇七年に、第三巻は一八〇八年に、第四巻は一八一〇年に、そして第五巻は一八二一年にそれぞれ刊行されていた。この著作は、Benecke 自身によって、一八二四年に英語に、一八二五年にフランス語に、一八二八年にイタリア語にそれぞれ翻訳されていた。また、Benecke は一八三二年に、Ein Buch über den jetzigen Zustand der hamburgischen Versorgungs-Tontine を書いてゐた。<sup>(5)</sup>なお、前述のごとく、Benecke は一八〇六年に、ハンブルクで最初の生命保険株式会社である Lebens-Versicherungs-Societät を設立していた。<sup>(7)</sup>

保険教育についても、ハンブルクはドイツの他の都市に先きかけて行なっていた。一六一三年には、ハンブルクに Akademisches Gymnasium が創立されていたが、これは、学校 (Schule) と大学の中間段階にぞくするものとして、二七〇年間存続した。生徒が専門教育を受ける前に、二つの学期において一般教育講義 (Allgemeinbildende Vorlesungen) が行なわれた。<sup>(8)</sup>また、世界に開かれた港湾都市としてのハンブルクにおいては、啓蒙的精神において、とく

に経済学的側面からの保険の研究が行なわれていた。Johann Georg Büsch<sup>(5)</sup>は一七五六年以来、数学のギムナジウム教授であり、また、商業学院(Handelsakademie)の講師をつとめた。彼の商業学上の大著作として、一七九二年の Theoretisch-praktische Darstellung der Handlung がある。この著作は保険制度、とくに海上保険の営業経済・国民経済的問題について詳細な検討を加えており、多くの指導的な見解を示している。<sup>(6)</sup>ゴータ保険施設(Gothaer Versicherungsanstalten)の設立者である Ernst Wilhelm Arnoldi は、商業学院で Büsch の講義を聴いていた。<sup>(7)</sup>Büsch の功績をたたえて、彼の記念碑がハンブルクの内アルスター湖に面したロンバルト橋(Lombardsbrücke)の近くの公園内に建てられている。<sup>(8)</sup>

ハンザ高等裁判所の多くの裁判官も、その余暇を海上保険法の研究に費やした。まず、Friedrich Voigt は一八六七年の普通海上保険約款を作成した。彼の生涯を通じての最高の著作は、一八八七年の Das deutsche Seevericherungs-Recht である。<sup>(9)</sup>また、Voigt は Ernst Friedrich Sieveking がハンザ高等裁判所の初代所長(Präsident)になることについて配慮した一人でもある。Sieveking は海上保険法の研究においても名声を得ている。彼の著作のうちでとくに注目される点の第一は、「海上保険に関する商法典の諸規定の変更に關する法律草案についてのハンザ高等裁判所の意見」(Gutachten des Hanseatischen Oberlandesgerichts über den Entwurf eines Gesetzes betr. Änderung der Vorschriften des HGB. über die See.)<sup>(10)</sup>である。この意見において、Sieveking は、商法典の海上保険に關する諸規定を陸上保険に關する諸規定に合わせるために、海上保険に關する商法典の諸規定の変更を念入りに検討した。この意見において一般に明らかなことは、いかに Sieveking が「海上危険の特殊性」ということを確信していたかということであり、彼は、海上保険法と陸上保険法の諸規定を同等に扱うことに反対していた。<sup>(11)</sup>第二に、Sieveking の大きな論文は、「船舶の無事到着に對する保険理論への寄稿」(Ein Beitrag zur Lehre von der Versiche-

rung auf behaltene Ankunft eines Schiffes)<sup>(17)</sup>である。この問題は海上保険法の中で最も困難な問題であるが、Sieveking はこの問題を明瞭に解明し、ライヒ裁判所に対してハンザ裁判所の判例を擁護しようものと解していた。<sup>(18)</sup> また、Sieveking は、ハンザの大学に保険法に関する最初の、かつ唯一の講座が設けられることについて強い関心を示してゐた。<sup>(19)</sup> その『Die Hamburger Universität, Ein Wort der Anregung, Hamburg 1905』の中において、彼は世界主義的の大学 (Kosmopolitische Universität) の創立を主張していた。彼はいう。「経済と運輸、海外的関心事、そして国際政治に関するすべてのことは、ハンブルクにおいては、他の大学において行なわれているよりもより強く考慮されなければならぬ<sup>(20)</sup>」と。裁判実務と保険研究は、ハンザ高等裁判所所長 Max Mittelstein の場合においても一対となっていた。彼の活動は、賃貸法、内水船舶航行法、物権法、郵便法の範囲を超えて、海法、海上保険法にもおよんでいた。保険法的にとくに注目されるのは、一九〇一年に刊行された『Kommentar zum See-Unfallversicherungsgesetz vom 30. Juni 1900』である。一九一九年にハンブルク大学が創立されたとき、彼は名誉教授となった。彼の講義、講演等は海上保険法にもおよんでいた。<sup>(21)</sup> しかし、海上保険法に関する Sieveking と Mittelstein の貢献もさることながら、ハンザ高等裁判所副所長 Carl Ritter の大きな貢献も見落しえない。その『一九二二年、一九二四年に刊行された Das Recht der Seeversicherung, Bd. I, II』は、疑いもなく海上保険法に関する最も重要な著作である。しかも、この深遠な著作は一人の人間によって一気に書かれたという、驚異を絶するものである。Ritter は一九一九年のドイツ普通海上保険約款の作成に際して強い影響力を与えた一人であり、これについて、彼は右の著作において詳細な註釈を加えている。このように、Sieveking-Mittelstein-Ritter の名は、ハンザ高等裁判所の所長による海上保険法の研究をきわ立たせている。<sup>(22)</sup>

また、前述のごとく、ハンブルク大学は一九一九年に創立されたが、これには Sieveking の力によるところが大き

かった。しかし、その当時、ハンプルクにはすでに保険学ゼミナール (Seminar für Versicherungswissenschaft) が存在していた。すなわち、一九一三年以来、Ernst Bruck はハンプルクで保険法の講義を行なっていた。一九一四年に、Max Warburg の提案にもとづいて、ハンプルクに保険制度のための永続的な講座 (Ständige Professur) が設けられ、Bruck はこの講座へ招へいされた。この講座は後にハンプルク大学へ移された。<sup>(22)</sup> Bruck の後継者が Hans Möller<sup>(23)</sup> である。Möller の初期の著作は、博士論文である *Gifgeschäht und Versicherung* 1932 をはじめとして、海上保険に関するものであったが、とくに、教授資格論文である *Summen- und Einzelschaden* 1937 は、私保険法を孤立したものとしてではなく、一般私法との関連において考察することの必要性を示唆するものとして、激賞に価する。<sup>(24)</sup> これらの著作を通じて、保険法学者としての Möller の不動の地位が確立したとみてよい。<sup>(25)</sup> 彼の著作は、著書、編書、論文、書評、判例批評など、多数にのぼっているが、その中でも Bruck-Möller, *Großkommentar zum Versicherungs-vertragsgesetz* は、保険法学的著作の圧巻 (Krönung) となっている。<sup>(26)</sup> また、Möller の国際的活動の頂点をなすものは、すでに一九三五年に Bruck によって創立が提唱されており、Möller がその創立者の一人となつて一九六〇年四月に創立された AIDA である。したがって、AIDA のルーツはハンプルクに求められる。<sup>(27)</sup> Möller は最も偉大な保険法学者の一人であり、世界における保険法の発展に大きな貢献をなした。とくに海上保険、保険契約法、保険仲立人に関するすぐれた業績を残し、保険業の監督および裁判所の判決に対して大きな影響をおよぼした。<sup>(28)</sup> Möller の生涯は、「保険法の生涯」<sup>(29)</sup> そのものであり、「国際保険学会の中心人物」<sup>(30)</sup> であり、「保険学の世界的巨人」<sup>(31)</sup> であった。Bruck と Möller によつて、ハンプルクはドイツ保険法の理論と研究の中心 (Zentrum) 的位置を占めたといつてよい。<sup>(32)</sup> なお、Möller の助手をつとめ、ハンプルク大学の教授であつたものとして、Karl Sieg<sup>(33)</sup> Reimer Schmidt<sup>(34)</sup> がおり、現在、ハンプルク大学保険学ゼミナールには、Möller の直弟子である Gerrit Winter, として、Herbert Bernstein,

Manfred Werber の三教授がいる。

なお、保険学教育のための研究所として、まず、ハンブルク大学保険学ゼミナール (Seminar für Versicherungswissenschaft) があり、また、一九一六年に研究者・実務家によって創立されたハンブルク保険学協会 (Versicherungswissenschaftlicher Verein in Hamburg e.V.)、一九五一年に創立されたハンブルク保険経済の職業教育研究所 (Institut für Berufsbildung der Versicherungswirtschaft Hamburg) がある。さらに、保険法の研究については、外国法・国際私法のためのマックス・プランク研究所 (Max-Planck-Institut für ausländisches und internationales Privatrecht) も大きな貢献をなしているが、これは一九五六年に、その場所をハンブルクへ移したものである。なお、一六九〇年にハンブルクに創立された数理団体 (Mathematische Gesellschaft) も保険数理学の推進に功績があった。<sup>(17)</sup>

——法律論叢——

- (1) Büchner, a. a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 304.
- (2) Möller, a. a. O. S. 280;
- (3) Möller, a. a. O. S. 280.
- (4) Möller, a. a. O. S. 280.
- (5) 一七七六年にハノーファで生まれ、ハンブルクでは商人として活躍し、後にイギリスで長く生活し、一八三七年五月八日にハイデルベルクで死去した (Manes, a. a. O. S. 299)
- (6) Möller, a. a. O. S. 280; Manes, a. a. O. S. 299.
- (7) Möller, a. a. O. S. 280.
- (8) しかし、聴講生がいなかったために、これは一八八三年に閉鎖された (Universität Hamburg, Personal- und Vorlesungsverzeichnis, Wintersemester 1981, S. 7)。<sup>18)</sup> しかし、一般講義部門 (Allgemeines Vorlesungswesen) は存続した。これは、一般人のための公開講座とならんで、一定の職業についての講座 (神学志願者、行政官、税関吏、開業医、商人、薬剤士、教師のための) を含んでいた (Universität Hamburg, S. 7)。
- (9) 国民経済学者・商業学者・数学者としての Johann Georg Büsch は、一七二八年にリュネンブックで生まれ、一七三二年



にハンブルクへ移り、わずかの期間を除いて、死去する一八〇〇年までハンブルクに住んでいた(Manes, a.a. O.S. 416)。  
ドイツ保険学の創始者といわれている(Büchner, a.a. O. Versicherungsmedizin und Versicherungsrecht 1964, S. 46)。

(10) Möller, a.a. O.S. 280.

(11) Möller, a.a. O.S. 280; なお、保険企業家としての Arnoldi については、水島・前掲三八―四八頁参照。

(12) 記念碑は、彼の死去(一八〇〇年)後の一八〇二年に、J.A. Arens の計画のもとに建立され、その後たびたび移転された後、現在は本文に述べた場所に立っている(ハンブルク文化庁・記念碑保護局 Dr. Hermann Hipp 氏からの一九八二年十一月十二日の私信に42)。

(13) Möller, a.a. O.S. 282.

(14) 一八三六年六月二四日にハンブルクで生まれ、ほとんどの生涯をハンブルクで送った。まずハンブルクの裁判所に勤務し、それからハンブルクで弁護士となり、弁護士として市参事(Senator)に任命された。一八七九年のハンザ高等裁判所の開設に際して初代所長となり、この地位は、一九〇九年一月一三日の死去まで続いた。また Sieveking は国際海法会議の主宰者として、長年にわたって海上保険に関わっていた。国際海上取引、海上保険法の促進に大きな役割を果たした(Manes, a.a. O.S. 1151-1152)。

(15) Bundesratsdrucksache Nr. 130 von 1904 (Manes, a.a. O.S. 1152).

(16) Möller, a.a. O.S. 282.

(17) Zeitschrift für die gesamte Versicherungswissenschaft VI, S. 592 (Manes, a.a. O.S. 1151).

(18) Möller, a.a. O.S. 282.

(19) なお、ハンブルク大学はドイツの大学の中でも若い大学にぞくする。その創立は一九一九年四月一日の Amtsblatt der Freien und Hansestadt Hamburg の中に記されており、一九一九年五月一〇日に開校した。しかし、その起源は前述の一六一三年創立の Akademisches Gymnasium に求められ、その閉鎖があった後にも一般講義部門は存続していた。一九〇七年の Hamburgische Wissenschaftliche Stiftung や一九〇八年の Kolonialinstitut の設立は、ハンブルク大学創立の過程に重要な意味を有している(Universität Hamburg, S. 7-8)。

(20) Möller, a.a. O.S. 282.

(21) Möller, a.a. O.S. 283.

- (22) これは、一九五三年にもとのままで再刊されたが、一九六六年、一九六七年に、第二版が Riter-Abraham, *Das Recht der Seevericherung*, Bd. I, II と二つ刊行されてゐる。
- (23) Möller, aa. O.S. 283; Heyn, aa. O. *Das schaffende Hamburg*, S. 30.
- (24) Möller, aa. O.S. 283; など、ハンブルク大学保険学ゼミナール図書館の中に、Sieveling, Riter, Bruck の写真が並んで掛けられている。
- (25) Möller は、一九〇七年三月三日にハンブルクで生まれ、一九七九年二月九日に急逝した。ハンブルク大学では Bruck の指導を受けた。さらに、フライブルク大学(指導教授は Heinrich Hoeniger)およびミュンヘン大学(指導教授は Wilhelm Kisch)で学び、一九三一年にハンブルク大学保険学ゼミナールの助手となった。一九三二年にハンブルク大学から博士の学位を受け(主審は Bruck)、一九三六年にハンブルク大学講師、一九三九年にハンブルク大学助教授、一九四一年に正教授となった。一九四二年一月二八日に Bruck が死去した後、保険学ゼミナールの所長を兼ね、一九七三年に大学を退官した(木村栄一「ハンス・メラール教授をしのぶ」(保険学雑誌四八六号)八六—八七頁)。主要著作については、木村・前掲保険学雑誌一〇四—一二頁「Festgabe für Hans Möller 1972, S. 561-578 (これは一九七二年までのもの)参照。
- (26) Karl Sieg, Hans Möller, in: Bruck-Möller, *Kommentar zum Versicherungsvertragsgesetz*, 8. Auflage Bd. 2, 1980.
- (27) 木村・前掲保険学雑誌九〇—九二頁。
- (28) Sieg, aa. O.; 木村・前掲保険学雑誌九二頁。
- (29) 木村・前掲保険学雑誌八八頁。
- (30) 木村・前掲保険学雑誌一〇二頁。
- (31) 木村・前掲保険学雑誌九四頁。
- (32) 木村・前掲保険学雑誌一〇〇頁。
- (33) 木村・前掲保険学雑誌一〇四頁。
- (34) Büchner, aa. O. *Versicherungswirtschaft* 1966, S. 798.
- (35) 一九一一年にベルリンで生まれ、ベルリンの Friedrich-Wilhelm-Universität で法学を学び、その後、ハンブルクにおいて、私講師、それから、員外教授(Außerplanmäßiger Professor)として、それと同時に、約一〇年間高等裁判所裁判官として活躍した。一九六三年から一九七三年までベルリン自由大学の正教授、一九七三年にハンブルク大学教授、一九七八

年に退官した (Vorwort, in: Festschrift für Karl Sieg, 1976)° Sieg は、Ausstrahlungen der Haftpflichtversicherung 1952 という、教授資格論文がある。この論文は、責任保険における被害第三者と保険者との多様な法律関係の体系的解明を目的としたものであり、長年にわたる、責任保険における損害清算人 (Schadenregulierer) としての実務経験によって裏付けられた論文である (Karl Sieg, Vorwort, in: Ausstrahlungen der Haftpflichtversicherung 1952)° なお、Sieg は Bruck-Möller の前述の大コンメンタールにも協力している° Sieg の一九七六年までの著作については、Vgl. Festschrift für Karl Sieg, S. 593-599.

- (36) ハンプルク大学教授を経て、現在はアーヘン・シュヘン保険会社社長 (木村・前掲保険学雑誌九六頁注一五参照)。彼の教授資格論文である Die Obliegenheiten 1953 の最大の特色は、保険契約法における種々の責務 (Obliegenheit) を全私法における責務と関連づけて体系化した点に存し、戦後における重要な教授資格論文の一つと云うべき (Widmung, in: Festschrift für Reimer Schmidt 1976)° 彼が一九七六年までの著作については、Vgl. Festschrift für Reimer Schmidt, S. 1043-1049.

- (37) Büchner, a.a. O. Versicherungswirtschaft 1981, S. 305; Ders., Zeitschrift für Versicherungswesen 1964, S. 290.

(一九八二・九・三〇)

本稿の執筆にあたっては、Dr. Franz Büchner 氏から多くの資料の提供を受け、また、木村栄一教授の業績に多く負っている。ここで深く感謝の意を表する。